

● 100万人参観運動を!

84年10月来館者数	7,803名
通算1カ月平均来館者数	4,976名
当月1日平均来館者数	300名
通算来館者数	502,626名

福竜丸だより

— 都立・第五福竜丸展示館ニュース —

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

去る九月の本校文化祭で、私も原爆を語る会(会員十五名)はヒロシマ、ナガサキにつづく第三の被爆として第五福竜丸問題をとりあげ、不十分なながらもそれを三十分余の8ミリ映画にまとめた。原爆を語る会は、一九八一年の四月に誕生した生徒有志の団体である。この語る会は、「現代国語」の授業で試みた井伏鱒二作「黒い雨」の紙芝居学習に端を発し、その後、本校第一回文化祭での発表に向けて生徒を集めたところになる。それ以来主に文化祭を発表の場にして、八二二年のヒロシマ、八三年のナガサキ原水爆を専ら進めてきた。表現方法も昨年まではスライドが中心であり、映画づくりは今回が初めてである。

スライド製作にあたっては、市内に在住されておられる被爆者諸氏の心暖まる援助と協力があつた。中でも、被爆当時の惨状を仔細に聞かせていただけたことは、その後の活動に大きな幅と厚味をもた

らせる弾みとなった。いかな現代っ子といえども、被爆当事者の口から伝わる阿鼻叫喚の地獄図絵には圧倒され、時には涙でインクビューが不可能になったこともあった。事実のもつ重味・迫力が生徒の感性を激しく揺さぶり、その先の認識へいかに強く迫っていくものであるか、ということもこの時に思い知らされた。

語る会も今年で四年目を迎えた。第四回目の文化祭参加にあたり、昨年来の念願であった全人類の死活に直接かかわる「核」兵器全面禁止へのアピールを検討した。ヒロシマ、ナガサキから現在の「核戦争三分前」へのアプローチである。私どもはためらうことなく第五福竜丸を選んだ。原水爆の生証人——第五福竜丸をくぐって、はじめて活動内容の一つの形ができると考えたことにも因る。

そうは言うものの、実際に取り組んでみると知らないことばかりで、いささか気が滅入った。結局、



都合四度の展示館訪問によって何とかイメージをふくらませることができたが、でき上がったフィルムをみる限りでは心もとないことしきりである。

今年はまだ、久保山さんの没後三十周年にあたる。仲間の職員ともども二度目の訪館をした七月七日、館員のご高配で図らずも第五福竜丸の甲板に立つことができた。点在していた「ヒビ割れ」の文字は、傷々しく久保山さんに重なる。核軍備競争の悪循環の中、昨今とみに高まる核戦争危機の叫びを聞くにつけ、「核戦争阻止」「核兵器完全禁止」の平和原則は何としてでも守り抜かなければならないものと考えた。この道こそが「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」との久保山さんの遺言に報いる正しい道と確信している。微力ながら、この道を教育の現場で、生徒とともに実践的に追求していきたいと思っている。

(神奈川県立相武台高校教諭)

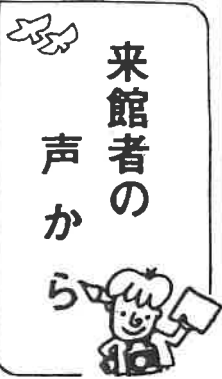
広島・長崎、そして第五福竜丸

「原爆を語る会」、8ミリ制作

橘善男

私はなんだか夢の島にきました。が、第五福竜丸のことについては知りませんでした。今日なんとなくこちらの方へ来て、なにげなしに入ってみました。最初はいいな、いってこの船があるのかなあと、いろいろ見ているとだんだんわかって来て、感動し、涙が出て来そうになりました。

長女と長男と三人で一生懸命一文字一文字読んでいました。長女がまだ小三なのでよくわからなくて、お母さんなんなの、この船どうしたのとききます。私は原爆のことについてあまりよく知りませんが、私なりに長女に言ってみせました。長女は一生懸命聞いていました。まだよくわからないみたいでした。私もこれからは原爆のことについていろいろ知りたし、勉強したいと思えます。原爆は絶対あってはいけないし、なくなっしてほしいです。(江東区枝川亀井雪子)。



人間が人間をほろぼすなんて絶対反対だ! 今、写真を見て誰も思ったでしょう。あんな悲しい時にも生きていた人がいたんだ、一生懸命生きていたんだ。これからの人間に、人をいたわる心をなくして、生きて行ってほしくない。(山形中 中上)。

こんなすごいことがあっていいものだろうか。これからの将来をになう私達のと看は絶対にこんな世の中は作らない(山形中 木地谷)。

私は今日でここに来るのは二回目です。二五日に来て、家へ帰り原爆の悲惨さなどを妹に話をしたらどんなものなのか行ってみたいというので、二人でまた来ました。この悲惨な原爆で被害をうけた人の写真をたくさんのがみて、原爆の恐しさを知り、核への反対へみんなで目を向けて行けばいいなと思えます。(由香里)。

原爆というのは本当におそろしいと思えます。もし、今原爆が日



調布市桐朋小学校四年生 (84・10・18)

本に落ちたらと思うと、夜もねむれなくなりそうです。人間が生きていくには原爆なんかより平和、助け合う心だと思おう(桐朋中一、薫)。

戦争は人がおこすものだからふせげるといってしまえばいいけれど、本に書いてありました。わたしもそのとおりだと思います。戦争は人が苦しむものです。戦争は人のできたくないものだと思います。だからその戦争を二度とおこしてはいけないと思えます(小六年)。

編集後記

▼今月は、ビキニ水爆被災船「神通川丸」のことをとりあげた。被災船というところ、かつて朝日新聞の記者によって「弥彦丸」の元乗組員の追跡調査が行なわれたことがある。そのひとり、平三義さん(80)は被災後、体の無理がきかず一九七二年に船を降り、七五年に船員保険の継続療養が切れたため、被爆手帳を申請したが「原爆医療法」は広島・長崎の被爆者だけが対象といわれ認められなかった。現在、平さんは長崎県・口之津町の自宅で療養中。偶然にも、新栄クラブの本多和徳さんの故郷も口之津町とのこと。「早速、新栄通信」を平さんに送ってあげたい」と本多さん。

▼和光中学(町田市)の榎葉先生のクラスが文化祭に「戦争と平和」のテーマで発表を行なった。生徒たちは、安斎育郎、森下一徹両氏の話を聞いたたり、基地調査、市民団体主催の「反核・平和のひろば」に参加するなど、いろいろな体験をしたとのこと。榎葉先生の感想を次号で紹介したい(は)。

ビキニ被災から30年

船員の機関紙、被災船の特集

放射能の恐怖、今でも 「神通川丸」——元乗組員の証言

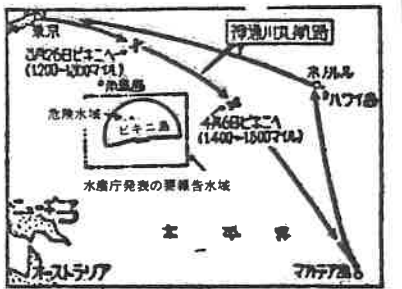


神通川丸

ある船員の親睦団体の機関誌がビキニ水爆被災船の特集を組んだ。船の名は神通川丸。新栄船舶株式会社(東京中央区)の新栄クラブ機関誌「新栄通信」11月号である。

「海上の安全と平和を願う気持ちから特集を組んだ」——編集にあたった同クラブの本多和徳(加藤吉三郎)両氏に話をうかがってみた。

神通川丸(二万五千トン)は一九五四年三月二日、岡山県玉野市を出航して仏領マカテア島でりん鉱石を積み、五月二日岩手県釜石に帰港した。ビキニでの核実験の後、三月二六日はビキニ北西方二千二百哩、四月六日はビキニ北東方千四哩付近にあった。灰はかぶらなかつたがスコールを毎日浴びた。三月下旬ごろ、乗組員は原因不明の頭痛を訴えるようになり、その後も倦怠感、頭痛、下痢、歯ぐきの出血を伴う者もいた。船医は



核廃絶の意思強く、予想以上の反響

新栄クラブの会員、三百余名。「新栄通信」は世界の海を仕事場とする会員の唯一の交流の場。「通信」には、平和について、というテーマで会員の投稿欄がある。ある日加藤さんは、造船所に向向している船員から「自分は神通川丸の乗組員だった」と聞かされる。

原因を核実験ではないかと判断した。帰港後の精密検査の結果、十一名が白血球の減少から急性放射能症の疑いがあるとされ、下船休養の勧告をうけた。

当初、それ程の期待をしていなかったが、次々に送られてくる手記は「半分になった白血球が何時に半分まで減ったか」「安心して航海出来る地球にしたい」……、それは思い出話にとどまらないものだった。また、核廃絶への意思が強いことにも驚かされた。最終的に八人から手記を、二人がインタビュー

「自分も白血球が半分減った経験がある」——この特集を出してから、加藤さんは他の会社の船員仲間から、こんな言葉を聞くようになった。

被災船の掘り起こしを「このことがきっかけとなって被災船の全体的な掘り起こしをして欲しい。それぞれの職場には記録が残っていると思うし、充分可能性はある」と加藤さん。

「世界の海が戦場のわれわれは何んらかの形で、戦争体験をしなさい。陸の人にはわからないかも知れない」と本多さん。

新栄船舶所属の船は八隻。行先は主として、オーストラリア、欧州。本田さん(操舵手)加藤さん(機関士)も来年早々には、航海に出る。

「世界の見聞が広がって、骨髄液を取られる、ものすごく痛い検査を二度受けた。沢山のインターの前、この人が原爆症の誰それと、引出されては恥しい思いもした。四ヶ月目には何とか検査の上で正常と云われ、再び海上生活に戻った。」

元神通川丸乗組員の手記

「いままでに不安」

三十年前のことなのでハッキリ覚えていない点もあるけれど、放射能汚染のことは生忘れれることではないね。いまだに病気をすることがある。放射能が原因じゃないかとおびえる状態ですよ。当時は操舵手で船橋にいたから、スコールに打たれた記憶はないし、むしろ海水風呂が原因だと思っただよ。マカテア入港前から、ノドが痛み出し、下痢というより軟便が続き、これは病院に入院してからもしばらく続いたと思う。大阪で精密検査し下船勧告を受けて……。

「新栄通信」より抜粋

(村井義男/当時操舵手)
「モルモットだった」

新聞で大きく報道され、名前まで出たものだから、今のよう電で連絡の出来ない家族の心配は大変なものだったらしい。被害を受けた私たちも、半分になった白血球が何時正常に戻るのか、薬はあるのか、後に障害は残らないのか、そして生まれる子供に影響は出ないのか……、医者に聞いてもはっきり答えられる人はおらず、誰に文句を云えば良いのか、暗い気持ちだった。そして、要領を得ないまま、二カ月と二十日の乗船を公傷と云うことで下船した。それから三カ月は奈良良医大附属病院のモルモットだった。毎週通院しては検査ばかり、胸骨にド

(大神聡男/当時三機士)
「十年たつて……」

十年くらいたつてから、歯ぐきから出血したんです。船員保険病院で検査したら、血小板減少症、斑病だと言いますわ。原因はね、放射能による公算が強いということだったけど、「血小板」だけでは放射能症であるという証明はできないって逃げてるんですね。広島は被災者の症状とも違つかね。二八、九才で歯はガタガタになるし、心臓病は出る、高血圧になるという状態で、医者は「放射能が原因である」と認められないが、すべての症状が異常だ」と云うんですね。

(鈴木 茂/当時事務長)

展示館見学者50万人に 百万へ! 故郷の中学生に記念品

十月二十四日、第五福竜丸展示館の見学者が五〇万人を越えた。開館以来八年四月二千五百余日、一日平均二百人。見学者ナシの日はない。

五〇万人目の見学者は和歌山県の中学生。開館と同時に修学旅行で東京に来た新宮市の城南中学校二二一名の団体見学であった。第五福竜丸建造の地・古座とはほんの目の先、船は故郷の人々によって百万の瞳の祝福を受けた。

百万人見学者運動の一くぎり、無数の人々の努力の積み重ねであり、特にセレモニーは行なわなかったが、同校にささやかな記念品として三宅泰雄会長筆による「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」久保山愛吉」の色紙を贈呈、一層の努力を誓った。

本紙八月号で船の精密模型の専門家宮内晴美さんのことを紹介したが、同氏によって第五福竜丸の模型がいよいよ作られることになった。元乗組員大石又七さんもこの話を聞き、協力を申し出、一日宮内さんと懇談、写真や設計図ではわからない内部の構造も記憶を大石さん自身も別に模型を作る。

長崎の原爆資料館からも完成を心待ちにしているとの電話が展示館に寄せられた。完成予定は来年夏。

第五福竜丸平和協会第62回理事会決定事項(概略)

▼日時 84・10・22(月)午後2時~4時

▼会場 本郷・学士会分館

▼参加理事 斎藤鶴子、猿橋勝子、田沼肇、本多喜美。

1. 第61回理事会議事録承認

2. 活動報告(略)

3. 当面の活動計画 (イ)資料室建設の促進。八月、十月二回にわたる対都(建設局・南部公園)折衝を見てより強力な要請行動を必要としている。田沼理事を中心に行動計画をたてる。(ロ)船体修理。60年度予算編成時にあたり「報告書」に添う予算措置を行なうよう要請中。59年度・60年度に全額の修理経費が支出され年内に工事着工が実現するよう要請を強める。館内でもアピールを強めていく。

(イ)写真集「母と子でみる第五福竜丸」の刊行。原稿を了承。十二月刊行、初版八千部。(ニ)59年度第二期展示計画。乗組員30年の軌跡、マグロ漁、展示ケース新調など計画を了承。(ホ)国連軍縮週間と見学者50万人突破。(ヘ)次回12月17日予定。4. 昭和59年度予算上半期実績報告(略)

5. 議事録署名人選任